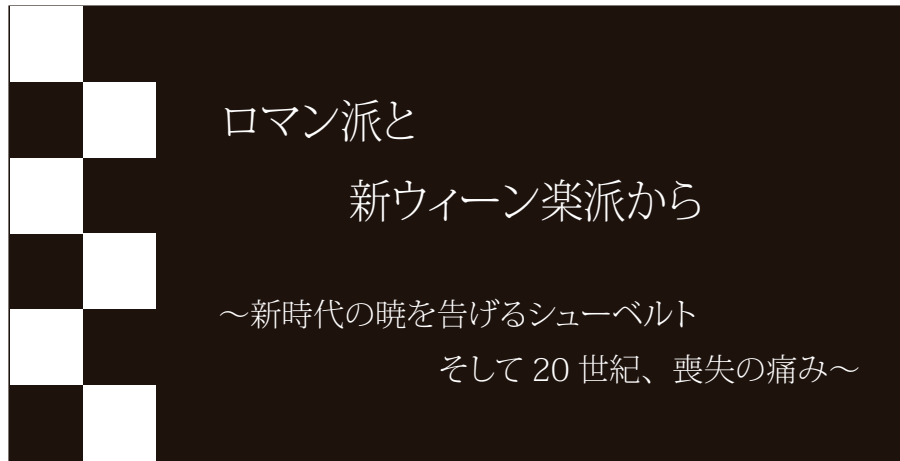


神戸市室内合奏団 定期演奏会

先達から受け継ぐもの、新生するもの
～学び合い、与え合う音楽家たちの交流の軌跡～

神戸市演奏協会 第388回公演



2013 年 12 月 6 日 (金) 19:00 開演
神戸文化ホール 中ホール



<プログラム>

A.v.ウェーベルン： 弦楽のための緩徐楽章 (弦楽オーケストラ版)
A.v.Webern : Langsamer Satz für Streichquartett (für Orchester arrangiert)

Langsam, mit bewegtem Ausdruck ゆっくりと、動きのある表現で

F. シューベルト： ヴァイオリンと弦楽のためのロンド イ長調 D438
F.Schubert : Rondo für Violine mit Begleitung des Streichquartetts D438

Adagio ~ Allegro giusto アダージョ〜アレグロ・ジュスト

ヴァイオリン独奏 : 白井 圭

A.v.ウェーベルン： 弦楽四重奏のための五つの楽章 作品5 (1929年の弦楽オーケストラ版)
A.v.Webern : Fünf Sätze für Streichquartett op.5 (für Orchester arrangiert, 1929)

I . Heftig bewegt - Etwas ruhiger	はげしい動きで一少し遅く
II . Sehr langsam	非常に遅く
III . Sehr bewegt	非常に動きをもって
IV . Sehr langsam	非常に遅く
V . In zarter Bewegung	やさしい動きで

<休 憩>

R.シュトラウス： メタモルフォーゼン~23の独奏弦楽器のための習作~
R.Strauss : Metamorphosen Studie für 23 Solostreicher

プログラム・ノート

中村 孝義
(大阪音楽大学教授・音楽学)

前音楽監督のボッセさんの晩年には、ハイドンやモーツァルト、さらにはベートーヴェンから、シューベルトを経てメンデルスゾーンに至る初期ロマン派の作品までをも演奏する機会が頻繁にあったので、2管編成によるそれなりの規模を持った形で演奏することも少なくなかった神戸市室内合奏団だが、元々は管楽器を含まない弦5部による弦楽合奏がこの合奏団の基本的編成である。今年の年間コンセプトである「先達から受け継ぐもの、新生するもの」を思い返せばわかるように、岡山潔音楽監督は、今年は原点に立ち返って、もう一度合奏団の基本を洗い直し、その上で確たる歩みを積み上げていこうと考えておられるようだ。その意味で編成をむやみに大きくせず、コアメンバーによる演奏を中心に据え、その実力の向上を図っておられるように見受けられる。

今回は客演指揮者に、ウィーンからマイスルさんを迎え、変化しつつある時代の中で、先達のものもしっかりと受け継ぎながら、新たな地平を開いた作品を中心にプログラムが組まれた。ベートーヴェンと全く同時代に生きながら、とりわけ器楽の分野において、古典派とは一線を画するロマン派という新時代の暁を告げる作品を書いたシューベルト、19世紀から20世紀へと時代や音楽のあり方が大きく転換するそのただ中であって、師のシェーンベルクや盟友のベルクとも違った、独特の新しい境地を開いたウェーベルン、人類がかつて経験したことがないような第2次世界大戦という極限状況の中で、喪失感をいやというほど味わいながら、後期ロマン派の語法によって、次の時代へとつながる世界を暗示する作品を生みだし続けたR.シュトラウス。彼らの作品には、いずれも時代の波に翻弄されながらも、次の時代への確たる歩みが示されており感銘深い。マイスルさんの棒の元、そうした作品の意味が、神戸市室内合奏団の手によってしっかり引き出されてくることを期待したい。

A.v.ウエーベルン： 弦楽のための緩徐楽章 (弦楽オーケストラ版)
A.v.Webern： Langsamer Satz für Streichquartett (für Orchester arrangiert)

新ウィーン楽派と呼ばれる3人の作曲家の中でも、その静謐で緻密、かつ凝縮された作風で、とりわけ際立った存在感を示すのがウエーベルンだ。その作品は押しなべて短く、しかも節約された音使いによって繊細で張り詰めた緊張感を示す。ただ今日最初に演奏される作品は、彼がまだ22歳の時（1905年）に生み出された作品で、シェーンベルクやベルクから時代を画する新しい語法をすでに学んではいたものの、後に明らかとなる彼の斬新な語法がまだ確立されているわけではない。むしろ一聴すればわかるように、作品の構成法や調性感もあくまで伝統的なものにとどまり、その甘い情感の漂う雰囲気は、後期ロマン派に対するウエーベルンの憧憬さえ感じられる。これが公に初演されたのは死後17年もたった1962年のことであり、生前には一般に知られることもなかったのだが、後の作品にも感じられる独特の美感と併せて考えてみると、ここには彼の根底にあるものがすでに明確に示されているように思えない。本来は弦楽四重奏のために書かれた作品だが、今日はジェラード・シュウオーツによって編曲された弦楽合奏の形で演奏される。

F. シューベルト： ヴァイオリンと弦楽のためのロンド イ長調 D438
F.Schubert： Rondo für Violine mit Begleitung des Streichquartetts D438

シューベルトといえばまず念頭に浮かぶのはリートだろう。わずか30年ほどの短い生涯に600曲以上ものリートを残したのだから、彼が歌曲の王と名付けられるのもけだし当然といわねばならない。しかし一方で彼は、ベートーヴェンが創作の中心においた交響曲、弦楽四重奏曲、ピアノ・ソナタといった器楽ジャンルにおいても、ベートーヴェンに負けないくらい多くの作品を残している。その没年が1年違いで、ベートーヴェンと同時代に生きたシューベルトであって見ればこれも当然ではあったが、面白いことに、リートと器楽作品が示す方向性はかなり異なる。シューベルトの音楽を、古典派とロマン派のどちらに位置付けるべきかといったことが議論されるくらい、彼の音楽には両方の性格が入り組んでいるのだが、リートが意外に古典的な枠組みを守っていたのに対し、器楽の世界にはよりロマン的性格が強く滲み出ている。彼は、意識的ではないにしても、器楽分野で新しい扉を開きつつあったのだ。とりわけ歌う楽器であるヴァイオリンを使った作品には、彼の天国的ともいえる叙情的な美しさが縦横に示されているものが少なくない。

例えば今日演奏される「ロンド イ長調」は、シューベルトがまだ19歳（1816年）のとき、アマチュアのヴァイオリン奏者であった兄フェルディナンドのために作曲したと考えられる作品である。そのため様式的にはまだウィーン古典派の影響から抜け切っていない所もある。しかしアダージョの序奏に続いて、特にロンドに入ってから演奏効果に満ちた華やかな旋律の美しさにはロマンティックな面がはっきりと示されており、シューベルトがまだ19歳であるにもかかわらず、先達から受け継いだものをそのままにとどめず、彼の感性を生かして新生させようとしていたことが明らかだ。コンマスの白井圭が、若きシューベルトのロマンあふれる抒情をどのように掬い上げるか、注目の1曲である。

A.v.ウェーベルン： 弦楽四重奏のための五つの楽章 作品5
(1929年の弦楽オーケストラ版)
A.v.Webern： Fünf Sätze für Streichquartett op.5(für Orchester arrangiert, 1929)

最初に演奏された作品からわずか4年後の1909年に書かれたものだが、「弦楽四重奏のための五楽章 作品5」は、先の作品から一転し、ほぼ同時期に他の二人の盟友（シェーンベルク、ベルク）と同様、無調の世界へと突き進んだ画期的な作品で、ここにいたってウェーベルンは調性の枠組みから解き放たれた独自の世界を打ち立てる。

この作品では、先の作品に比べてはるかに新しい響きの世界が繰り広げられるが、そこには師のシェーンベルクの音楽に時に感じられる、感性よりも知性が優先された冷徹で索漠とした雰囲気は無く、むしろ極度に集約された密度の濃い響きからは独特の色気さえ感じられる。全体は標題にもあるように5つの楽章からなるが、それぞれは演奏時間にしてわずか2～3分、第3楽章など1分足らずという短さである。激しい動きと切り詰めた表情で内面の激しい抑揚を示そうとするかのような第1楽章、全曲を通じて弱音器が使われ、いかにも静謐で神秘的な表情を見せる第2楽章、極端に短い時間の中で、鋭いリズムによって内面世界への激しい切れ込みを見せる第3楽章、再び弱音器をつけたゆっくりした動きの中で、様々な音色変化により独特の情感を滲ませる第4楽章、ゆっくりした動きの中で、これまでのすべてをじっくり反芻するような第5楽章というように、短いながらも振幅の大きな世界が表現される。今日はウェーベルン自身が「まったく新しいものになった」と述懐しているこの作品の、1929年の弦楽オーケストラ版で演奏される。

R.シュトラウス：
R.Strauss：

メタモルフォーゼン~23の独奏弦楽器のための習作~
Metamorphosen Studie für 23 Solostreicher

R. シュトラウスといえば、壮大なオーケストラを縦横に駆使した数多くの交響詩や、《サロメ》《バラの騎士》などのような、大オーケストラの華麗な表現を最大限生かしたドラマティックなオペラがよく知られている。ただ注意しておきたいのは、まだ34歳であったにもかかわらず、まるで自分自身の作曲家人生を総括するような交響詩「英雄の生涯」を1898年に書き上げたあと、彼が交響詩作曲からは手を引いてしまったことである。そのあとは、もっぱらオペラにその精力をつぎ込んだのであった。ただ今日取り上げられる「メタモルフォーゼン」は、弦楽のみによる合奏曲ではあるが、珍しく晩年の1945年（81歳）に手がけられた純粋器楽作品で、いわば例外的な作品なのである。

シュトラウスは、1942年に初演されたオペラ「カプリッチオ」で彼の作曲の仕事が終わったことを宣言しており、その後作曲されたいくつかの作品を、自身の手慣らしのようにみなしていた。この「メタモルフォーゼン」も副題に「23の独奏弦楽器のための習作」と名づけているように、そうした位置づけにある作品である。作曲の依頼は彼の盟友でありドレスデン国立歌劇場の音楽総監督であったカール・ベームから受けたものだが、献呈はスイスの指揮者で多くの作曲家たちを支援したパウル・ザッヒャーにされ、初演も1946年1月にチューリヒでこのザッヒャーの指揮で行われた。

1945年3月初めに彼の山荘があったガルミッシュ・パルテンキルヘンで作曲し始め、わずか一か月半ほど後の4月の12日には完成している。作曲中に、彼の多くのオペラを初演し、愛してやまなかったドレスデンの歌劇場（ゼンパー・オーパー）が爆撃によって町もろともに壊滅しており、戦争によってドイツの町や文化が破壊されてしまったことに対する悲しみから、作品のいたるところに深い嘆きの気持ちが込められている。副題にもあるように、普通の意味での弦楽合奏曲ではなく、23の楽器を独奏楽器として扱っているところに大きな特徴がある。曲は自由な三部形式をとるが、ベートーヴェンの交響曲第3番「英雄」の第2楽章、葬送行進曲の冒頭から引用された動機から導き出されたと考えられる主題や自身あるいは先輩の作品から引用された動機などが、絶えず変容（主題にとらわれず自由に展開）し、増殖しながら進められる。シュトラウスの楽器操作法やオーケストレーションの巧さ、書法の緻密さなどが遺憾なく発揮されたユニークな傑作である。

-
- | | | | | | |
|------------------------|-----------|-------|-------|--------|-------|
| ○指揮 | ヨハネス・マイスル | | | | |
| ○コンサートマスター
ヴァイオリン独奏 | 白井 圭 | | | | |
| ○第1ヴァイオリン | 井上 隆平 | 前川 友紀 | 黒江 郁子 | 幸田 さと子 | |
| ○第2ヴァイオリン | 西尾 恵子 | 谷口 朋子 | 中山 裕子 | 萩原 合欽 | 奥野 敬子 |
| ○ヴィオラ | 亀井 宏子 | 中島 悦子 | 横井 和美 | 木下 雄介 | 伊藤 慧 |
| ○チェロ | 伝田 正則 | 田中 次郎 | 奥田なな子 | 池村 佳子 | 福富 祥子 |
| ○コントラバス | 長谷川 順子 | 幣 隆太郎 | 四戸 香那 | | |

<プロフィール>



ヨハネス・マイスル
Johannes Meissl

オーストリアを代表するヴァイオリニスト・指揮者。リンツのブルックナー音楽院を経てウィーン音楽演劇大学卒業。アメリカでラサール弦楽四重奏団の薫陶を受け、1982年ウィーン・アルティス弦楽四重奏団を結成し、数々の国際コンクールに入賞。ウィーンを本拠地に世界的なカルテットとして多彩な活動を展開している。ウィーン音楽演劇大学教授およびヨーロッパ室内楽アカデミーECMA芸術監督としての教育活動に加え、近年は指揮者としての活動も精力的に行い、ヨーロッパ各地で高い評価を得ている。



白井 圭
Kei Shirai

東京藝大附属高校を経て、同大学を卒業。日本音楽コンクール第2位及び増沢賞受賞。2007年より文化庁海外派遣員としてウィーン音楽演劇大学に留学。ARDミュンヘン国際音楽コンクール第2位及び聴衆賞受賞。ウィーン国立歌劇場の契約団員を半年間務める一方、ソリストとして、数々のリサイタルや、チェコ・フィルや新日本フィルなど内外のオーケストラと共演。田中千香士レボリューションアンサンブル音楽監督・指揮者。2013年度より神戸市室内合奏団コンサートマスター。



神戸市室内合奏団
Kobe City Chamber Orchestra

1981年、神戸市によって設立された神戸市室内合奏団は、実力派の弦楽器奏者たちによって組織され、神戸、大阪、東京などを中心に質の高いアンサンブル活動を30数年に亘って展開している。弦楽合奏を主体としながらも、管楽器群を加えた室内管弦楽団としての活動も活発で、バロックから近現代までの幅広い演奏レパートリーのほか、埋もれた興味深い作品も意欲的に取り上げてきた。また、定期演奏会以外にもクラシック音楽普及のための様々な公演活動を精力的に行っている。

1998年、巨匠ゲルハルト・ボッセを音楽監督に迎えてからの14年間で演奏能力並びに芸術的水準は飛躍的な発展を遂げ、日本を代表する室内合奏団へと成長した。毎年のシーズンプログラムは充実した内容の魅力あふれる選曲で各方面からの注目を集め、説得力ある演奏は高い評価を受けている。

内外の第一線で活躍するソリストたちとの共演も多く、2011年3月の定期演奏会でのボッセ指揮によるJ. S. バッハ「ブランデンブルク協奏曲全6曲」の名演はCDとしてリリースされている。また、2011年9月にはドイツのヴェストファーレンクラシックスからの招聘を受けてドイツ公演を行い、大成功を収めている。2013年度からは、日本のアンサンブル界を牽引する岡山潔が音楽監督に就任し、ボッセ前音楽監督の高い理念を引き継ぎ、合奏団のさらなる音楽的発展を目指して、新たな活動を開始した。